

茨城キリスト教大学

文学研究科 (英語英米文学専攻・教育学専攻)

ニュースレター No.10



2018年7月発行

### ー働きながら大学院で学びませんかー

#### 目次

研究科長のメッセージ

スタッフ紹介

修士論文紹介

修了生からのメッセージ

論文紹介

FD 活動報告

オープンキャンパス

文学部研究科進学説明会



文学研究科科長  
上野 尚美

文学研究科には、勤務しながら学びたい社会人(特に現職の先生方)を応援する3つの履修形態がありますが、ご存知でしたか。

一つ目は、「長期履修制度」です。仕事をしながら大学院に通う等の事情により、通常の学生よりも履修可能な科目や研究指導を受ける時間が制限される方を対象に、最初から3年間の履修計画を立てて学ぶ制度です。しかも、授業料は2年間分のみです。2年履修計画で入

学した方も、諸事情により長期履修に変更したい場合は、研究科の承認を経て、1回に限り変更することができます。また、時間割も個別の事情を極力配慮して組んでいます。小さい大学院だからこできるメリットだと思います。

二つ目は、「大学院教員派遣制度」を利用した履修形態です。この制度を利用することにより、1年目は大学院にフルタイムで学び、2年目は勤務をしながら、大学院に週1回程度通い、修士号を取得します。派遣要項に本学の名前が記載されていないので、当該制度が利用できないと思われる方が多いようですが、協議により適合性が判断されますので、まず申し出ただければと思います。

三つ目は、「職員の自己啓発等休業プラン」を利用した履修形態です。2年間の休業の間、留学することも可能になります。

いずれの制度も詳細については事前相談でご説明いたしますので、興味をもたれた方は、ぜひ一度ご連絡(入試広報部 0120-56-1890)ください。

#### スタッフ紹介



三輪 健太

英語英米文学専攻  
助教  
(言語学研究 担当)

私は統語論を専門としており、英語や日本語にみられる言語表現がどのような構造となっており、そこにどのような操作が働いているかを研究しています。日々、日英語の文を前に格闘している私ですが、そもそもの関心は人間の「精神/脳(mind/brain)」がどのような活動をしているのかという点にあります。この関心と私の研究は、一見関連のない領域であるように思われるかもしれませんが、当然のことながら言語活動は脳内で行われており、あらゆる言語表現は脳内での活動、すなわち脳内で起こる演算操作によって派生するものと考えられます。このことから、個々の言語表現の構造を知ることができると考えられます。学生時代にこの領域が人間の精神活動と深く結びついていることを知り、言語学及び統語論の世界に飛び込みました。

私は障害児心理学を専門としており、特に知的発達に制約を示すダウン症などの知的障害や、他者との関わりにおいて独自の特徴を示す自閉症やアスペルガー症候群などの自閉症スペクトラム障害の心理特性についての研究を行っています。研究の目的に応じて、様々な課題を自ら考えますが、実施する度に、こちらの想定とは異なる反応が現れ、「どうしてそのような行動が現れたのか?」と考えるのも、この研究領域の魅力の一つではないかと思います。近年、障害児心理学や発達心理学の領域においては、脳研究に代表される生物学的色彩の強い研究が無視できないものとなりつつありますが、昔ながらのある種、素朴な心理学の良さも残しつつ、自らの研究を進めていきたいと考えています。



平田 正吾

教育学専攻  
講師  
(特別支援教育課題研究、心理検査法演習など担当)

## 修士論文紹介



2017 年度に提出された論文のうち、英語英米学専攻の藤崎優子さんの修士論文を紹介します。

### 英語英米文学 専攻

#### 藤崎 優子「英語力伸長に関する指導法の研究-ディクテーションを活用して」

藤崎優子氏の研究の目的は、(1) 初級レベルの生徒の英語力を伸長させるために、ディクテーションを使った英語指導が効果的かどうか、(2) 初級レベルの英語力を持つ生徒に対するディクテーション指導が英語力を伸長させることに効果的であった場合、英語学習への動機付けにつながるかどうかを考察することであった。

本研究の参加者は、藤崎氏が授業を担当していた県立高等学校定時制課程の1・2年次生31名であった。自宅学習として、授業で使用する教材の音声データを授業前に何回も聞いておくように指示しておき、授業で部分ディクテーションを行った。その際、もし単語のスペリングがわからない場合には、カタカナ解答も認めることとした。ディクテーションの採点基準は、英語で解答し正解した場合は◎、カタカナで解答し正答と判断された場合は○、その他は不正解で×という3段階で評価した。カタカナ解答を正答と判断した根拠は、5名の英語のネイティブスピーカーに対し、カタカナで書いた解答を藤崎氏が読み上げ、5名のうち3名以上が正答である英語を認識できた場合に○とするものであった。当初は参加者全員の結果を平均し、量的統計をとる予定であったが、実際実験を始めてみると、欠席する者、授業には出席しているが課題を解かない者、解答できずに戸惑う者が予想以上に多く、数値化して統計をとることは困難であると判断し、質的統計をとることに変更せざるをえなかった。ただし、参考資料として、実験に積極的に参加した参加者(9割以上の出席率)12名に限定して平均点の算出は試みた。

目的(1)に対しては、実験後の参加者から、「この授業を受けてより多くの英語を覚えられたと思う」等の肯定的な意見が多く得られ、ディクテーションを取り入れた指導により、生徒から授業に積極的に参加する意欲を導き出せたという点において効果的だったと言えるのではないだろうかと結論づけている。また、参考程度に試算した結果ではあるが、事前テストと事後テストの結果を比較すると、英語力の伸長はわずかではあるが、上昇したという報告を付け加えている。

目的(2)に対しては、「単語は書けないけどカタカナでもいいからちゃんと聞き取って書こうという気持ちになった」等の感想から、カタカナ解答を認めたことで、以前はまったく解答をしようとしなかった生徒に対し、解答をしようとする動機づけにつながった可能性について言及している。

最後に下記の2つの提言を行っている。

【提言1】 英語に苦手意識があるような初級レベルの英語学習者には、外発的動機付けのためのひとつのストラテジーとして、カタカナを利用した指導は効果的であると思われる。

【提言2】 初級レベルの英語学習者に外発的動機付けのためのひとつのストラテジーとしてカタカナを利用したとしても、ある一定の時期が来たらカタカナを利用した指導は徐々に減らし、内発的動機付けのための指導に切り替えていく指導法がよいと思われる。

藤崎氏がとったデータの中で、カタカナによる解答を藤崎氏が読み上げ、英語のネイティブスピーカーがどの程度正しい英単語であると認識したかという付録の情報は、今後の英語指導の参考資料となり、研究自体も英語教育の分野の一端に多少なりとも寄与する結果が得られたと言えよう。

指導教員 上野尚美(英語英米文学専攻 教授)



## 修了生からのメッセージ



私が茨城キリスト教大学の3年生になった年に大学院が開学しました。当時の私は、大学を卒業後、英語科の教員になることしか考えておらず、「大学院進学」というのは全く考えていませんでした。15年ほど茨城県内の公立中学校で英語科教員として勤務しましたが、大学時代の恩師から「大学院で英語教育を専門に学べるコースができる」と伺い、思い切って退職し、母校の大学院で2度目の学生になりました。

大学院では、学校現場での経験から生まれ

た疑問を中心に研究を進めました。また、教員の経験を生かして、教員採用試験に挑戦する学生さんのお手伝いもさせていただきました。研究を進めるにあたり、中学校教員時代の仲間に協力してもらったり、他学科の先生にもご協力をいただいたりしました。

茨城キリスト教大学は学生と先生方の距離がとても近く、自分のやりたいこと、知りたいことを、とても熱心にかつ丁寧にご指導くださる先生がたくさんいらっしゃいます。おかげさまで現在は、私立小学校で英語科教員として勤務しております。大学院を修了して5年経ちますが、今でも村上教授、上野教授のご指導をいただきながら、台湾台中市の小学校と Skype で交流をする貴重な体験をさせていただいております。

(江戸川学園取手小学校教諭 円城寺 真理子 2013年3月 英語英米文学専攻修了)

## 報告 2017年度 文学研究科FD活動

### 《教育学専攻》

教育学専攻の教員によるFD検討会(Faculty Development: 教員の教育能力の向上を図るための検討会)が、2018年2月13日に実施されました。まず、教育学専攻のこれまでの運営について、その内容と意義が議題となりました。運営が円滑かつ合理的に進められてこそ、学生への指導が適切なものとなり、また、教員の指導力が発揮されることを念頭におきつつ、教務関連業務、入試広報関連業務等の業務内容および教員間の役割分担の現状が確認されました。

ついで、教育学専攻のなかでも心理学領域に焦点を当て、今後のカリキュラムの在り方についての意見交換が行われました。今後、心理学領域では、公認心理師法の施行によって、心理職の在り方や心理学に関わる教育課程に大きな変化が生じることが予想されます。このような事情を背景として、教育学専攻における心理学のカリキュラムの今後について、活発な意見交換がなされました。

櫻井 由美子(教育学専攻 准教授 2017年度FD企画・世話人)

### 《英語英米文学専攻》

英語英米文学専攻では、2018年2月17日-18日、FDおよび茨城県の英語教育に資するために、Special Lecture Seriesとして「英語教育学講座」を実施しました。今回の講座では、応用言語学およびTESOLの世界的権威であるオーストラリアのカーティン大学教授、ロッド・エリス(Rod Ellis)氏をお招きしました。2月17日は「練習からタスクへ言語活動の充実」、2月18日は「文法指導とタスクに基づく言語教授と評価」をテーマとし、講演会とワークショップを行って頂きました。ワークショップに参加した英語教員を目指す学生や大学院生、そして、中学校・高等学校の教員やALTは、積極的な質問とロッド・エリス教授からの様々なアドバイスを通して、Task-Based Learningについての実践的な学びを得ることができました。

ジャブコ・ユリヤ(英語英米文学専攻 助教)





